

新資料紹介・翻刻と考証

芭蕉判『十八番発句合』の新出写本

復 本 一 郎

〔解題〕

芭蕉は、寛文十二年（一六七二）の序を付して、三十番の俳諧発句合『貝おほひ』を著わしている。芭蕉、二十九歳の時である。後に江戸の書肆中野半兵衛方から板行されたのであった。

この『貝おほひ』に続いての俳諧発句合が『十八番発句合』である。跋文の日付は、「延宝六初冬日」となっている。一六七八年、陰暦の十月。芭蕉、三十五歳である。前年の延宝五年（一六七七）には、内藤風虎主催、任口、季吟、維舟（重頼）判の『六百番俳諧発句合』に作者として参加しているので、この時期、俳諧発句合という歌合を踏襲しての文芸形式に親しみ、大いなる関心を寄せていたであろうことが窺知し得るのである。

ただし、この芭蕉判の『十八番発句合』は、大正十五年（一九二六）に日本俳書大系の第一巻『芭蕉一代集』（日本俳書大系刊行会刊）の中に勝峰晋風によって翻刻紹介されるまでは、知られることのなかった著作であった。

た。今、誤植訂正が施されている昭和三年（一九二八）刊の『芭蕉一代集』（春秋社刊）を繙くと、勝峰晋風は、巻頭の解題において、

十八番発句合 写本を以て伝へられたので板本の存在はいふまでもなく、『一葉集』にすら所載されざる未発表の発句合である。旧洒竹文庫にも別に一本を蔵する筈であるが、比較校訂するを得なかった。

と記し、作品解説の部分では、

此の発句合は六番句合及び十二番句合の二篇から成立し、写本のまゝ伝はつて来たので、板本のある事を聞かないのみか、『一葉集』その他にも収録されて居ない。旧洒竹文庫にも一写本の存するを見たが、本文と大体に於て一致して居たと思ふ。

と記している。

この少し後、昭和九年（一九三四）に出版された続俳句講座第四巻『俳諧書誌篇』（改造社刊）に収められている荻野清稿へ句合集解説では、この『十八番句合』

について、次のごとく記している。

十八番句合

坐興庵桃青判。写本一冊。
延宝六年十月(判)。

六番句合及び十二番句合の二篇より成る四季の発句合である。句は何人の作とも知れないが、芭蕉の判詞が「貝おほひ」などゝ異り、謹厳なる筆致を以て書かれてをり、且つその跋に、「前後十八番の句合、やつがれ馬頭になりて、物定の博士とさゝくれ待る。

…中略…我ながらかたはらいだけれど、そのかたはらに筆をけがして、かみ・中・下の品をわかり待るを、たま／＼にもうなづく人あれかしとこそ」とて、謙遜な態度の下に記されてゐるのを見れば、相当名ある人の作ではなかったかと思はれる。稿本或は刊本の存在なく、写本のみより知られない事は遺憾であるとはいへ、兎に角此句合の伝存は、芭蕉の初期の研究に一つの貢献をなすものであるに相違ない。

以後、『十八番発句合』に対する評価は、この荻野清の評価が大筋で踏襲されて今日に至っている。ただ「句は何人の作とも知れないが」の部分については、大内初夫著『芭蕉と蕉門の研究——芭蕉・酒堂・野坡——』(桜

楓社、昭和四十三年刊)所収「芭蕉判『十八番発句合』

について——発句作者の発見とそれにかかわる一、二の問題——」によって、大きな進展が見られた。すなわち十八番、三十六句の作品中、十四句の作者を明らかにし、

六番句合を調泉一派の句合せ、十二番句合を調和の弟子調泉の自句合と推定したのであった。

しかして、以後の芭蕉全集の類は、善本が存在しないこと、勝峰晋風紹介本、および旧西竹文庫本の存在が、今日では不明であることをもって、先の勝峰晋風翻刻の『芭蕉一代集』における活字本を底本とするということ

が、やむをえず行われているのである。『定本芭蕉大成』

(三省堂、昭和三十七年刊)しかり、『校本芭蕉全集

第七卷 俳論篇』(角川書店、昭和四十一年刊)しかり、

『古典俳文学大系5 芭蕉集 全』(集英社、昭和四十五年刊)しかりである。そして、その際、いずれの活字

本も、天理図書館綿屋文庫に蔵されている唯一の(私が

これから紹介する新資料が出現するまでは)写本である

蓼齋加焉筆写本(筆写年代不明)が参照されていた。た

だし加焉筆写本への評価は低く、『校本芭蕉全集 第七

卷 俳論篇』の大内初夫稿の解題には「本文は誤字・脱

文などもあるようで大系本(筆者注・日本俳書大系で勝

峰晋風が活字化した一本)に比べて必しもすぐれている

とはしがたい」と記されている。

私がこれから翻刻紹介しようとしている一本は、形態的には十二番句合が最初に置かれており、六番句合がそれに続くという形であるので、天理図書館綿屋文庫の加焉筆写本に近いのであるが、本文は、勝峰晋風紹介の活

字本と一致する箇所もあり、両者とは別種の本文である場合もある、といった興味深いものである。本書によって、はじめて文意が明らかになる、といった箇所も少なく、善本と思われる。

「新出『十八番発句合』の素性」

まず、新出『十八番発句合』が収められている私家蔵の写本の書誌を記しておきたい。

半紙本（縦二十三・七厘、横十六厘）全一冊。写本。
表紙、水縹色。題簽、左上に貼付、縦九・一厘、横六・七厘。左のごとく記されている。

奥の細道

嵯峨日記 元禄四

拾式番句合

六番句合 延宝六

常盤屋句合 延宝八

田舎之句合

嘉永三年 庚戌 於相州大磯写之 宜山房

本文、七十一丁。その中で『十八番発句合』十丁。半丁六行の野線が板で刷られているが、その各行に二行筆写している場所が多い。

書誌は以上であるが、巻末部に「干時嘉永三 庚戌 年相州大磯駅於鴨立庵写之 北越長城川西ノ産 宜山房北松」と記されている（「北栢」とも読めるが、「北松」と読

んでおく）。すなわち、北越（新潟）の北松なる俳人が嘉永三年（一八五〇）、相模の鴨立庵で、芭蕉関係の俳書六種（『拾式番句合』と『六番句合』を合わせて一種と見れば五種）を筆写したものである（筆写年代が明らかにされている唯一の写本ということになる）。ということは、大淀三千風ゆかりの鴨立庵にこれらの俳書が伝来していたということであろう。嘉永三年の頃の庵主は、慶応二年（一八六六）に没している十世島田立宇（りゅう）ということになる。平林鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』（書畫珍本雑誌社、大正十二年刊）を繙き「立宇」の項を見ると、「鴨立庵十世と号す、越後人、相州大磯住」と記されている。すなわち、立宇と北松とは同郷ということなのである。それゆえ、鴨立庵への何日間かの滞在、そして伝来の（あるいは立宇所持の）芭蕉関係の俳書の披見、筆写が可能だったのであろう。恐らく旧知の関係だったのであろう。

*

そこでいよいよ新出『十八番発句合』の本文を左に翻刻して掲出するが、資料としての価値を重視したので、本文には、濁点、半濁点はもちろんのこと、句読点等も一切付さなかった。原文のままである。ただし、明らかに仮名遣いの誤りは、脇に（ママ）と付しておいた。行移りも原文（底本）のままである。ただし、漢字につい

ては、異体字等も含めて、原則として現行の字体に改めた。

なお、勝峰晋風所持本による日本俳書大系『芭蕉一代集』所収の活字本と著しく異なる箇所には、参考までに傍点を付しておいた。また、便宜、一番より十八番、そして跋文までに通し番号を付した。

〔新出『十八番発句合』翻刻〕

十二番句合題

水祝
残雪

待花^{暮春}

郭公^{火燧}

五月雨^霰

七夕

名月雨

木の実^{秋暮}

時雨^霜

以上

①一番 水祝 残雪

水い^{つゝ}わ^{つゝ}ひ軒端の松やひと時雨

菜飯より雪間や見せてゆふ煙

左水祝ひを軒端の松によせ侍は門飭の松

なるへし時雨て色の常盤なるを夫婦の

中によせて彼松の精霊殿と現し

来り給にやと感心不少 右も又雪の隙より

草のはつかに見えし初たるけしき菜飯

に見侍る尤賞翫すへき義ながら聊等

類の難有しまゝ以左為勝

②二番 待花

まつ内やかは^{つゝ}き上戸の枕のはな

待花ややれとおもへは峯の色

左のかは^{つゝ}き上戸は地黄坊樽次なとか子孫にや

さもしき心には花を愛するの跡猶不浅侍

れとも耳馴たるに覚え候右も又花まち

侘て四方の峯に怨する有さま深切なれ共

峯の色といふ所にて少シぬかりて侍るまゝ雲と

有たき句のやうに候扱こそ山の端ことにかゝる

白雲と西上人もななめ給ふとかや両句さのみ

勝負付かたし

③三番 花 暮春

花さかり四方の芝居や秋の暮

上野已来青葉にかはる暮春の宿

上野谷中に打まれて花の盛り芝居物寂たる

大夫座元の花も紅葉もなき風情殊に秋

の夕くれは理りと覚えて珍重不斜と

いへとも予か門葉杉風花つゝし花堺町と

いふ句を作り爰かしこの短冊にも書ちらし

侍れは等類にひかれ残念に候 右は花の跡

とふ春の嵐に匂ひのこりて華の面影忘れ

ぬも捨かたくやさしき処侍るまゝ勝とすされとも

左の作には少おとり候にや

④四番 郭公

深山木や声のもしめほとゝきす
損の夢又の声なき時鳥

みま木のもとしめはいかなる金持のするわ
さやと頼母しくこれを宝の山ほとゝきす
ともいふへきか 右方大方損したる
郭公しはらく公義なるましきか

⑤五番 五月雨

須广の浦庭前にあり五月雨

編笠にかひかうきけり皐月雨

五月雨を須广の浦に見立たる作意中にもかの
浦はさひしき故の名也けり先珍重光る君
もさみたれのつれく侘給ふ事彼物かたりにも
見えたり 右のかひ編笠も猶古からす心より
言葉に至りて能俳諧と申へし熊谷蓮
葉等のたてあみ笠まことに当風の姿是に
とゝまり侍る左右きわめ分ちかたく
能持と定畢

⑥六番 七夕

さそふき出こよひはらはむ星の水

二人寝の袖やなみよけ銀河

左は年にまれなる星のちきりなれは
瘡の血にて紅葉の橋をも染るにやと興有て
おかし二人寝の星も袖つく水など
読るためしもおもひいてられなからふき
出のしたる男星実正にみえて一句の病
なしとや申さん

⑦七番 名月雨

燭台や雨かよひ出すこよひの月

気力なき楊枝の先や雨の月

銀燭秋光月の影にもおさくおとるましき
百目かけの蠟燭にや 右も又條先動
の唐歌を楊枝に寄侍るは妙観か刀をもつて
猿屋か手際に削り磨る玉柳彼水
紋楊枝とや申へきされともあかさ闇さを
論する時は燭台の光りまし侍らむ

⑧八番 木実 秋暮

栗かきや猿かやとりの塵壺の谷

かし馬の隙なかりけり秋の暮

塵壺の谷とは塵壺を谷に見立たると聞え
なから何とやら名所を作意していふよう
に聞侍る若壺の谷といふ所も有てにや未
さある処は見ざる聞ざるの知恵うすき
判者なめり又かし馬の隙なきは御伽
御咄の送りむかひと見えて心ふかくいひ残し
たる有さま天晴御馬候

⑨九番 時雨

なんにも山のこる松さへ大時雨

しくれけり衣手の森洗濯屋

左山もあらはにと詠る新古今の詞は尤なから
させる作意なし殊に大時雨といふ事聞
へからず 右衣手の杜を時雨に染させたる
せん濯屋の働き針の先程も難なく誠に
手きゝの仕業なるへし織そふ秋のからにしき
立かさねたる衣手の森と詠る彼かゝる夜
左の大時雨大まけならんとそ

⑩十番 しくれ

時雨に色童子は松より弱かりけり

日々記や筆にかわかぬむら時雨

此童子は大江山の酒すきにや誠斯く陳神便

奇特のか鬼をも所ひしくへき一句の姿
つよき所見え侍る綱金時もはたし右又日々
記の筆かはき兼ねるぬれ色つや／＼としほ
らしく手まめに書付る筆の跡反古になさ
んは無下の事なれば両句しはらく持にて差置物なり

⑪十一番 こたつ 霜

うたゝ寝やあつらへの夢置こたつ

かねそ風梢をくゝる霜のいろ

詠の夢珍重なから仙楊三物発句に

先年出し侍れば是も先作にひかれ申候

右の句鐘の声を嵐に送らせあらしの

色を霜に見せたる風興なきにもあらず仍為勝

⑫十二番 あられ 歳暮

しのもみや袖に音ある玉あられ

としそ暮山郭公夢しやよ夢

しのもみやといふより袖に音有りとつゞけられ

たる作意掠の葉みかきの玉霰馬腦珊瑚

も光をうしのふへし又歳暮の郭公

もきのふこそ早苗取りしかたとよめる哥の

心も籠りて珍らしけれども其郭公

縁語求度其上下の五文字もぬるく聞え

侍れは愈以左為勝

六番句合題

初春 花

子規 立秋
夕かは 月

菊 雪

秋暮 炭

⑬一番 初春

左 のり弓やゆかけの三指礼なんめり

右 来る春や夜明のあした又おかし

左 賭弓のゆかけにて三指つきたる礼義

正しく見え侍る右の夜明の朝兼法師

筆のすさひもなつかしく曙近き程まで足

を空にしておとろくしく物さわかしき

有様誠に野分山嵐は明渡る空の気色

さも有へし感心此句にとまりながら

左の賭弓もむつかしき題を一作意なし侍る

も又おかしければ勝負定ぬ事にそなりぬ

⑭二番 花

左 散はなや横手の内に山おろし

右 花の香やこゝろも言葉もよし野山

ちる花に山嵐作意なきこゝちせらるゝか
咲たる花なとゝ五もし有度但シ予か愚意
の至らざる所か右又珍しからず洛の貞室か
これはくとはかり花のよしの山といへる
秀句に猶此句も気おされ侍んかし

⑮三番 郭公 夕貞

左 きかぬとそ何処ても聞たほとゝぎす

右 ゆふ顔やあはら家の昔し古雪隠

郭公古し右の句は碓の音に聞えける五條あた

りの古き雪隠のかほりもつまいたうこかし

たる扇の匂ひに隠されて風流やさしく

言葉の花のひかり露そふ夕顔なるへし

⑯四番 立秋 月

今朝の秋籠屋か軒にしられけり

ほんのくほに月か入けりけふの月

籠屋か印に秋かせの驚れたるさま誠に

わり竹のこまかなる所をさかし求め

侍れと等類のかれたし右大空をあふ

きてほんのくほに月を隠したる俳諧

体誠にかく有へきにこそ

⑪五番 菊 秋の暮

酒そ春松かはしめてけふの菊

淋しさやつまる処はあきの暮

左花の春は門松に千代を契りて屠蘇

白散を汲そめ桃あやめなといふより菊酒

の時節に思ひとられたる作意松菊の便り

彼の渌か文勢も引て入へし右も又秋の

暮のさひしさにて寂滅の心も悟り侍も意深

けれども生前一盃の菊にはしかし

⑫六番 雪 炭

松かせやひとかたまりに枝の雪

つまはつれ炭の梢に花もなし

松の雪を風のひとかたまりと見立られたる作

尤手たれのしわざ右の句とは雪と炭との

たかひにやしかし炭の梢しかと本意聞得す

日ころの愚盲短才罪ゆるし給へかし

⑬

前後十八番の句合やつかれ馬頭に

成て物定の博士にさゝれ侍る十面顔

に分別くさくびらきたる様我

なからかたはらいいたけれと其かた

はらに筆をけかして上中下の品を

わかち侍もたま／＼にもうなつく人

有かしとこそ

延宝六初冬日

坐興庵

桃青

印

〔校異と考証〕

勝峯晋風は、日本俳書大系『芭蕉一代集』の翻刻の末尾に左のごとくに記している。通し番号を付して掲出してみる。

〔一〕⑬本文明瞭ならず、暫く判読に従へり。

〔二〕⑮本文、「彼の」と見ゆれど草体判明しがたし。

〔三〕⑯本文、「花つらし花揚時」と読みたれど「花

盛時」かとも覚ゆ。

〔四〕⑰本文、「猶たどらず」とあれど誤あるべし。

〔五〕⑱本文、「郭公」、郭公の上二文字あれど、

判読しかねたり。

勝峯晋風が、晋風所持本では文意が通らないと判断した五箇所である。右に翻刻した私家蔵の北松筆写本によって一つ、一つ確認してみることにした。文意を明らかにするために、ここでは、本文に句読点、濁点等を付す。まず〔一〕は、通し番号⑬の『六番句合』中の四番の判詞である。晋風本（日本俳書大系本）では「籠屋の印に秋風知りたるさま」となっている。北松筆写本では

「籠屋が印に秋かぜの驚れたるさま」となっている。天理図書館綿屋文庫の加焉筆写本は「籠屋が印に秋風の驚たるさま」となっている。この部分、『古今和歌集』中の藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」を踏まえての判詞と思われるので、北松筆写本が「一番文意が通るように思われる」〔二〕は、通し番号⑩、これも『六番句合』中の五番の判詞における晋風本の「松菊の便彼の淵が文勢も引て入べし」の箇所である。この箇所は、北松筆写本は、異同はない。加焉筆写本は「彼の淵」が「陶淵」となっている。陶淵明の「帰去来辞」の「三徑就荒、松菊猶存。攜幼入、宝、有酒盈樽。」との一節を踏まえての判詞である。この部分に関する限り、本文としては、北松筆写本は晋風本に近い。〔三〕は、通し番号③の『拾式番句合』中の三番の判詞である。晋風本は、「予か門葉杉風、花つらし花揚時、と云句を作り」とあるが、北松筆写本は「予か門葉杉風、花つゝじ花堺町、といふ句を作り」とある。加焉筆写本は、北松筆写本に同じである。この部分は、杉風句を確定し得ないと解決が付かない。〔四〕は、通し番号⑤、『拾式番句合』中の五番の判詞である。晋風本は、「右のかび編笠、猶たどらず」とある。北松筆写本は「右のかび編笠も、猶古からず」とある。加焉筆写本も、北松筆写本と同じである。こちらのほうが文

意が通る。〔五〕は、通し番号⑫、『拾式番句合』中の十二番目の判詞である。晋風本は、「哥の心も籠りて珍しけれ 郭公に縁語もとめ度か」とある。北松筆写本は「哥の心も籠りて珍らしけれども、其郭公縁語求度」とある。加焉筆写本は、晋風本とはほぼ同じ。ただし「郭公に縁語」が「郭公縁語」となっている。この箇所は、北松筆写本によって解決する。

以上、勝峰晋風が疑義を呈した五箇所に関して検討を加えてみた。この五箇所のみでも架蔵の北松筆写本が善本であることが窺知し得よう。

次に、私が傍点を付した箇所を順次見ていくことにしたい。ただし、右の五箇所と重複する場合には、省略に従う。便宜、通し番号を掲出して校異、時に検討を加える。

①の傍点部「彼松の精、賀殿と現じ来り、給にやと感心不少」の部分、晋風本（日本俳書大系本）では、「彼松の情、賀殿とり成し給にやと感心不少」とある。この部分、謡曲「高砂」の中の詞章「相生の松の精、夫婦と現じ来りたり」を踏まえているのであり、架蔵の北松筆写本の本文によってこそ文意が通るのである。天理図書館綿屋文庫蔵加焉筆写本は「彼松の精、賀殿と現じ来指にやと感心不少」とあり、文意、不明。誤写であろう。「菜飯に見侍る」は、晋風本、加焉筆写本ともに「菜飯

に見立侍る」。「等類の難有しまゝ」は、晋風本、加焉筆写本ともに「等類の難有之まゝ」である。

②の傍点部「地黄坊樽次」は、晋風本は、「彪黄坊樽次」、加焉筆写本は「地黄坊樽次」。北松筆写本、加焉筆写本が正しい。「さもしき心には」の部分、晋風本「さもしき心にも」。加焉筆写本は、北松筆写本と同じ。

「深切なれ共」の部分。晋風本「深切なれば」。加焉筆写本は、北松筆写本と同じ。「花まち侘て、四方の峯に怨ずる有さま」の部分、晋風本は「花待侘て、四方の峯に驚心する有様」、加焉筆写本は「花待侘て、四方の峯に放心する有様」とある。「花まち侘て」の措辞に注目するならば、「怨ずる」（うらむ）でなければ、文意が通らないこと、明らかであろう。「峯の色といふ所にて、少シぬかりて侍るまゝ、雲と有たき句のやうに候。扱こそ山の端ごとにかゝる白雲と西上人もながめ給ふ」の部分、晋風本では「峯の色と云所にて、少ぬかりて聞へ侍るまゝ、雲と有度句の様を、扱こそ山の端をくぐるしら雪と西上人もながめ給ふ」とある。この部分、西行の『山家集』中のへおしなべて花の盛に成にけり山の端ごとにかかる白雲の歌を踏まえているのであるから、架蔵の北松筆写の本文でなければ、文意が通らない。加焉筆写本も、北松筆写本に同じ。晋風本を底本とすること自体に問題があろう。

③の傍点部「已来」「青葉に」「座元」「やさしき処」は、晋風本では、それぞれ「以来」「青葉ぞ」「坐本」「やさしき所」である。加焉筆写本は、それぞれ「以来」「青葉と」「坐本」「やさしき所」である。大きな問題はない。「花つゝじ花堺町」の部分については、すでに述べた。

④の傍点部「もとじめ」「損の夢」「みま木の」「わざや」「宝の山」「大方」「公義」は、晋風本では、それぞれ「ともじめ」「損也夢」「深山木の」「わざにや」「初音の山」「大分」「云義」であり、加焉筆写本では、それぞれ「もとじめ」「損の夢」「深山木も」「わざや」「宝の山」「大分」「公義」である。この範囲では、加焉筆写本は、北松筆写本に幾分近い。検討は省略する。

⑤の傍点部「かび編笠も猶古からず」の部分については、すでに述べた。「左右きわめ」は、晋風本では「左右けじめ」、加焉筆写本は、北松筆写本に同じ。

⑥の傍点部「瘡の血にて紅葉の橋をも」「男星」は、晋風本では、それぞれ「瘡の血は紅葉の橋にも」「果」であり、加焉筆写本では、それぞれ「瘡の血にて紅葉の橋をも」「男星」である。指摘するに止めておく。

⑦の傍点部「猿屋が手際に削り磨る玉柳彼水紋楊枝とや申べき」、晋風本では「猿屋が手ぎはに削みがける玉柳波の紋楊柳とや申べき」であり、加焉筆写本では「猿

屋が手限に削り磨る玉柳波の放楊柳とや申べき」である。

「猿屋」については、浅井了意の『東海道名所記』の京・栗田口の項に「猿屋の楊枝とて、名物なり。楊枝は、みな柳なれども、こと更に河内国の玉越の里ぞ、楊柳はいたりてやはらかなる。この猿やは、たまこしの里のものとや」とあるのが参考になる。晋風本や加焉筆写本では、文意が通らない。北松筆写本によって、はじめて文意闡明となるのである。「玉柳」の「玉」は、美称であるが、「玉越の里」の「柳」の意も込められていよう。

「水紋」は、水面に起こる波紋の模様である。白楽天の詩「立春日酬錢員外曲江同行見贈」中の「柳色早黃淺。水紋新綠微。」の一節が、芭蕉に意識されていた可能性が強い。なぜならば、「條先動の唐歌」とは、『和漢朗詠集』中に収められている白楽天の詩句「柳無氣力條先動。池有波文水盡開。」を指摘してのものだからである。「水紋楊枝」は、「彼」とあるので「猿屋」の名物か。この箇所も、また、架蔵の北松筆写本『十八番発句合』が善本であることの証左となろう。

⑧の傍点部「聞えながら」「聞侍る」「有て」「御伽御咄の送りむかひ」は、晋風本では、それぞれ「きこえ」「きこえ侍る」「有之」「お伽咄の哀の送りむかひ」であり、加焉筆写本では、それぞれ「きこえ」「きこえ侍る」「有之」「お伽咄のむかひ」である。北松筆写本の

不備が目立つ。

⑨の傍点部「聞べからず」「織そふ秋の」「彼かゝる夜、左大時雨」は、晋風本では、それぞれ「聞よからず」「織て千秋の」「彼かゝが夜なべの事をいふにやとおかしく、さかりの大時雨」とあり、加焉筆写本は、それぞれ「聞よからず」「織そふ秋の」「彼らかか夜なべの事をいふにやとおかし。左の大時雨」である。指摘するに止めておく。北松筆写本に、一部誤脱あるか。

⑩の傍点部「斯く陣」「色」は、晋風本では、それぞれ「珍作」「色」であり、加焉筆写本では、それぞれ「契然」「色」である。問題のある箇所であるが、今は、省略に従う。

⑪の傍点部「仙楊」「風、興」は、晋風本では、それぞれ「仙風」「風景、興」、加焉筆写本では、それぞれ「仙物」「風、興」である。いかがか。「仙風」とすれば、杉風の父。他の俳号の俳人は、未詳。

⑫の傍点部「音る」「夢じやよ」「玆らしけれども、其郭公、縁語求度」は、晋風本では、それぞれ「音有」「夢いやよ」「珍しけれ 郭公に縁語もとめ度か」であり、加焉筆写本では、それぞれ「音有」「夢じやと」「珍しけれ 郭公縁語もとめ度か」である。一部、前述した。へしのもみや袖に音有玉簪の「有」、従来「有」と訓まれていたが、北松筆写本によってへしのみ

もや袖に音ある、玉あるあられゝであることが判明したのである。上五文字に「しのもみや」と切字の「や」があることもあり、当然「音ある」の句形であつたはずである。

⑬の傍線部「ゆがけ」「兼法師」「明渡る」「一作意なし侍る」は、晋風本では、それぞれ「ゆがみ」「彼兼法師」「明わたる」「一作こなし侍る」とあり、加焉筆写本では、それぞれ「ゆがけ」「兼法師」「明わたる」「一作言なし侍る」とある。全体、北松筆写本の本文がすぐれているように思われる。

⑭の傍線部「咲たる花」「貞室が」は、晋風本では、それぞれ「咲たか花」「貞室」であり、加焉筆写本では、それぞれ「咲たか花」「貞室が」である。指摘するに止めておく。

⑮の傍線部「郭公」「音に聞へける、五條あたりの」「つまたうこがしたる扇」「隠されて」は、晋風本では、それぞれ「左、郭公」「音にきこえたる、五條あたり」「つまたうこがせる扇」「けされて」であり、加焉筆写本では、それぞれ「郭公」「音に聞へける、五條あたりの」「つまたいたにこがしたる扇」「かくされて」である。この条では、架蔵の北松筆写本の本文と天理図書館綿屋文庫蔵の加焉筆写本の本文とが、近い関係にあることが窺われる。ただし、北松筆写本のほうが上質。

⑯の傍点部の「驚かれたるさま」の部分については、すでに述べた。「所を」「月を隠したる誹諧体」は、晋風本では、それぞれ「所迄」「月をかくしたる様、俳諧体」であり、加焉筆写本では、それぞれ「所を」「月隠したるさま、俳体」である。指摘するに止めておく。

⑰の傍点部「思ひとられたる」「心も」「意深けれど、も、生前一盃」は、晋風本では、それぞれ「おもひ出られたる」「心を」「哀ふかけれど、生敷一盃」であり、加焉筆写本は、それぞれ「おもひとられたる」「心を」「意ふかければ、生前一盃」である。北松筆写本の本文が一番的確で、文意が通るように思われるが、いかが。

⑱の傍点部「雪と炭とのたがひにや」「炭の梢しかと」は、晋風本では、それぞれ「雪と炭とのたがひにや」「炭の梢の花」であり、加焉筆写本では、それぞれ「雪と炭とのたがひにや」「炭の梢のしかと」である。指摘するに止めておく。

⑲の傍点部「分別くさくひらきたる様」「侍も」は、晋風本では、それぞれ「分別たゞく比と、ちぎりたるさまか」「侍るを」であり、加焉筆写本では、それぞれ「分別くさくひらきたる様」「侍るも」である。「分別くさくひらきたる様」とは、分別顔して『十八番発句合』を繙き、判詞を加えようとの意であるから、北松筆写本や加焉筆写本のほうが文意が通るであらう。

*

以上、架蔵の北松筆写、芭蕉判『十八番発句合』の本文を、日本俳書大系所収の勝峰晋風本（活字本）、そして天理図書館綿屋文庫蔵の加焉筆写本の『十八番発句合』の本文と比較検討してきたのであるが、北松筆写本が、独自の本文を有する善本であることが証されたように思われる。少なくとも、従来の芭蕉全集の類が底本としてきた日本俳書大系所収の晋風本（活字本）よりも的確な本文を有することが証されたであろう。今後、もし芭蕉全集の類が企図されたならば、目下のところ（よりすぐれた善本が出現しないならば）、本書をもって底本とするのがよいように思われる。